

谷川俊太郎 編

壘子白秋啄木

明治の詩歌

カラーグラフィック
学 研 版
明治の古典
全10巻

1 円朝・黙阿弥
怪談牡丹燈籠
天衣紛上野初花
井上ひさし訳

2 尾崎紅葉
金色夜叉
森 敦訳

3 樋口一葉
たけくらべ にごりえ
円地文子訳
田中澄江訳

4 泉 鏡花
高野聖 歌行燈
秦恒平訳編

5 徳富蘆花
不如帰
澤野久雄訳

6 島崎藤村
若菜集 春
伊藤信吉編

7 独歩・四迷
武蔵野 平凡
篠田一士編

8 森 鷗外
舞姫 雁
井上靖訳編

9 夏目漱石
吾輩は猫である
山本健吉編

10 晶子・敏
白秋・啄木
明治の詩歌
谷川俊太郎編

カラーグラフィック
明治の古典 10

明治の詩歌
谷川俊太郎編

一九八二年一月九日
第一刷発行

定価 二、四〇〇円

発行人 鈴木泰二

発行所 学研（株式会社学習研究社）
（〒四四五）東京都大田区上池台四丁目四〇番五号

電話 東京（〇三）七二〇一一二（大代表）
振替 東京八一四一九三〇

印刷所 日本写真印刷株式会社
廣済堂印刷株式会社

用紙 三菱製紙株式会社
王子製紙株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

製函所 凸版印刷株式会社（包材事業部）

※この本の内容・製本などに関するお問い合わせは、左記あてにお願いします。

文書は（〒一四五）東京都大田区上池台四丁目四〇番五号

学研お客さま相談センター「明治の古典」係

電話は 東京（〇三）七二〇一一二（大代表）

© GAKKEN 一九八一 本書内容の無断転載・複写を禁ず

明治の古典10

學子白秋啄木

明治の詩歌

谷川俊太郎 編

与謝野晶子

みだれ髪

吉原幸子訳

11

やは肌のあつき血潮にふれも見て さびしからずや道を説く君
愛と官能の世界を、ひたすらに生き歌った情熱の歌人と謝野晶子
世のこうごうたる非難を意に介さず、大胆に率直に彼女は歌う
処女歌集『みだれ髪』はそのかたみ、明治浪漫主義の開花であった

北原白秋

邪宗門

金と赤の、めくるめく色彩の幻想。すすり泣き打ちふるえる楽の音
よせては返す波のように、言葉は言葉を呼び、ふくらみ、砕ける――
まことに『邪宗門』はひとつの奇跡、白秋という天才の証しなのだ

45

6



注釈

逸見久美

写真

河村政敏
柳沢 信
小西祐典

一握の砂

85

歌は泉のように溢れた。見るもの聞くものが歌になった。泣きながら一日に百首も作った。二十六歳で、貧困の中に死んだ啄木にとって、歌は命だった。青春の放浪と望郷の思いを歌う、ただ一冊の歌集『一握の砂』は、時代を超えていまも生き続ける――

特集口絵 上田敏・海潮音

伊藤信吉 147

評 伝 明治の青春 晶子・白秋・啄木の肖像

辺見じゅん 157

エッセイ 晶子のうた

馬場あき子 166

エッセイ 「五足の靴」のことども

山本太郎 168

エッセイ 啄木を読む

栗原 彬 170

文学風土記 晶子・白秋・啄木・敏

大河内昭爾 172

年譜・与謝野晶子

177

年譜・北原白秋

178

年譜・石川啄木

179

晶子(抄)

歌のつくりやう(大正四年)より

42

白秋(抄)

印象日記(明治四十一年)より

82

啄木(抄)

明治四十年日記より
明治四十一年日記より
明治四十五年日記より

102 102 102



(50音順)

井上 靖
田 文 子
尾崎 秀 樹
山本 健 吉

編集委員

■執筆者

谷川俊太郎（詩人）

逸美久美（青山学院女子短期大学講師）

伊藤信吉（詩人）

大河内昭爾（武蔵野女子大学教授）

河村政敏（埼玉大学講師）

栗原 彬（立教大学教授）

馬場あき子（歌人）

辺見じゅん（作家）

三宅正太郎（美術評論家）

山本太郎（詩人）

吉原幸子（詩人）

渡辺美佐子（女優）

（50音順）

■写真取材協力・提供

井伊美術館 石井洋 石川玲児 梅野隆 大浦天主堂 太田元吉 家具の歴史館 鹿児島市立美術館 角川書店 河村幸次郎 北原白秋生家保存会 北原隆太郎 木村莊十三 国立国会図書館 坂本幽子 崎津カトリック教会 サンセット 浜民啄木記念館 市立函館図書館 瀬川弘悦 高槻カトリック教会 高橋哲 竹久不二彦 東京国立博物館 長崎市立博物館 南蛮文化館 日本近代文学館 日本美術家連盟 博物館明治村 PPS通信社 藤島綾子 プリヂストン美術館 平凡社 与謝野光 鞍馬寺

（50音順）

■撮影

柳沢信 小西祐典 近藤一彦 榊原和夫 高橋敏市川和正 小塩寿夫 大隅隆章 杉本保夫

■装幀

奥野玲子

■A D

奥野玲子

■レイアウト

アール・グラフィース

■編集スタッフ

（編集）星瑠璃子 宮下襄 有働義彦 斎藤正憲
岡部佳子
（校正）東和哉

■写真取材

中山順一郎 樋渡芳之 出縄守教

■造本管理

酒寄照男 野口元 北川昇

*掲載いたしました関連資料のうち判明いたしました著作権者及び所蔵者の了解は、可能な限りいただきましたが、万一手落ちがございましたら、編集部までご連絡下さい。

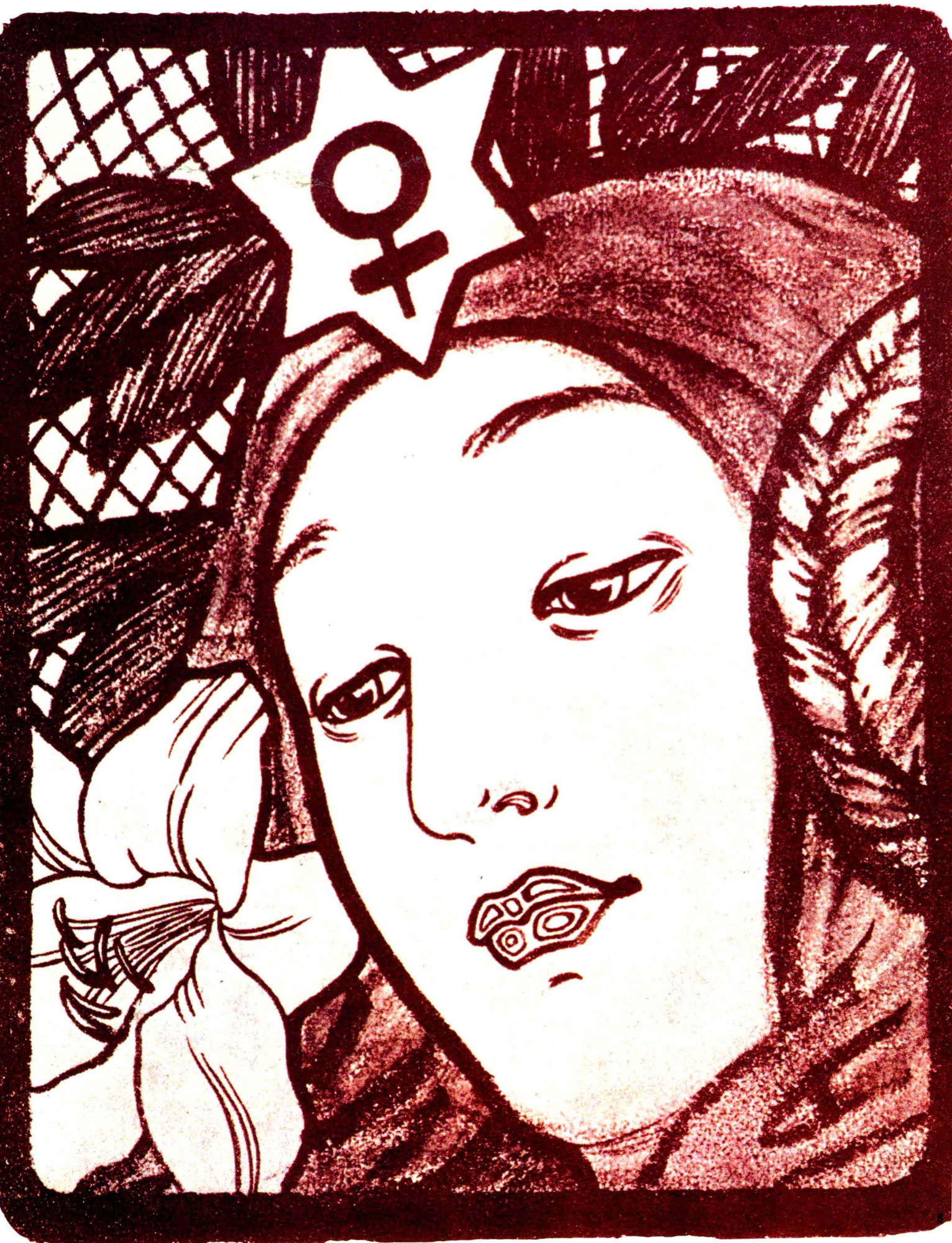
明治の詩歌

谷川俊太郎 編











明星

木下李太郎画 「パンの会」の饗宴 白秋の親友であった詩人・劇作家、李太郎もまたパンのメンバーの一人であった。会の特徴の一つであった江戸趣味が出ていて楽しい



みだれ髪



あなたの声を聞いたことがある

「みだれ髪」 から三十七年のちの録音

六十歳のあなたは歌を一首詠むたびに

あえぐように息を吸いこみ

小さなカセットに収められたその声は

若い日のあなたの愛した花野からではなく

生魚の匂う小暗い厨房から

まるで門付歌のように響いてきた

牀の奥深くかくされた生の秘密を

七五調が解き放つ



藤島武二の装幀になるアール・ヌーボー風の初版本『みだれ髪』表紙



藤島武二の『みだれ髪』挿画「恋愛」

恋ゆえにあなたは古い衣裳を脱ぎ捨てた

まぶし過ぎるその裸身は

時を距てて今も輝いている

だが十一人の子を生み暮らしに追われ

女としてあなたの辿ったそれからを

その出発から展望することはできない

へ赤裸裸な私自身を

私のために守り立てたい」と記したのは

どんなに裸になつてもついに魂だけは

明るみにひき出せぬことを

誰よりもあなた自身がよく知っていたから

そのもどかしさこそ歌の源だったから

吉原幸子 訳

燕脂紫
えんじむらさき



夜の帳にささめき尽きし星の今を
下界の人の鬢のほつれよ

星だったのに
天上の 夜の帳りのおかげで
歎びの臥所に戯れていた
充ちたりて輝いていた 星だったのに

わたくしは 自らのぞんで
にんげんの世界に下り立ちました
いまは 苦しいこの世の恋に
わたくしの頬はやつれ
ほつれたびんの毛が
ため息のように 乱れかかっています

その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

はたちです
生きています
春なのです
くしけずれば 長い黒髪は
生あるもののように波うちます
わたくし はたち
咲きほこる春そのままに
うつくしい

海棠にえうなくときし紅すてて
夕雨みやる瞳よたゆき

気まぐれに
紅皿に紅を溶いたものの
くすり指で 唇に
それを塗るのでもなく
気まぐれに
海棠の花の根もとに捨てて
夕暮れの雨を
ただぼんやりと けだるく
眺めやる――

* 鬢のほつれ 「鬢」は結髪の左右両側の部分の称。この歌は当時、難解歌といわれていたが、「鉄幹歌話」（『明星』明34・10）だけが分り易いと評している。編集時に新たに作られ『みだれ髪』の冒頭におかれた歌である。集中の歌には恋愛至上、青春謳歌、自己陶醉のみにとどまり切れぬ作者の恋の懊悩も歌われており、この歌もその一つで、晶子短歌を代表するものといえよう。一途に鉄幹を思慕して上京してきた晶子の心にかけて鉄幹の女性関係や生活などへの不信心、また現実へのささやかな苦悩なども、ここには歌われているように思う。

* おごりの春 華やかな青春。青春を謳歌した自己陶醉の歌。「かな」止めは旧派和歌の詠歎形式で集中わずかに残っているのだが、作者自身の深い感銘を表わすものとして使われている。佐藤春夫は『みだれ髪を読む』の中で「屈指の秀歌」と絶賛しており、集中有名な歌。

* えうなく 用無く。海棠の雨に濡れた風情は美人のうしろおれていようすを表わすもので、夕雨をみやる美人のたるそうにみえる姿態を歌ったもの。春夫は前掲の書で絵を描くための「紅」としてこの一首を閨秀画家のしぐさとみている。

「明星」(明治33年10月号)の表紙絵 藤島武二画 ロマン
の香り高い藤島の絵は、この雑誌の看板の一つであった

